

# 介護実習における経験と意欲に関する研究（Ⅰ） — 学生が「非援助的」と受けとめた指導者の言動の分析 —

## A Study of Experience and Motivation in Care Practice Students (I) : Analysis of Instructor's Speech and Behavior That Students Regard as "Nonsupportive"

(2000年3月31日受理)

川上道子  
Michiko Kawakami

Key words : 介護実習, 指導者の言動, 非援助因子

Care practice, Instructor's speech and behavior, Nonsupportive factor

### Abstract

In this study, I have shown what Care Major students in our college experienced in nursing care practices, and analyzed instructors' speeches and actions that the students interpreted as "nonsupportive." As a result, it has been proved that an instructor's speech and actions has a considerable influence on students' motivation. After analyzing instructors' speech and actions that the students take as "nonsupportive," I have classified the results into six categories. I have divided them again into three groups and studied them.

### I 研究の目的

介護福祉士養成教育における介護実習の比重は大きく、本学専攻科の教育課程においても総時間数840時間の内、介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを合わせて360時間、43%を占める。介護実習は各実習によってそのねらいが異なっているが、いずれも利用者と介護者の双方の関係や介護技術の学習を通して、介護福祉のあるべき姿を追求する場になっている。学生は学内では学ぶことのできない体験をするために実習に臨むが、介護福祉教育の歴史はまだ浅く実習施設では日々の業務に追われているため必ずしも最良の教育環境が整っているとはいえない。利用者への良質な介護を提供するためには、養成施設としても今後の人材育成に関わるという認識を明確にしなければならない。介護福祉士として夢を持って実習に臨む学生をどう育てるか、介護実習において学習意欲をどう維持・向上させていくかが実習施設側と養成校側との課題である。そのためには学生が介護実習において経験する内容を知り、意欲を持って実習に臨んでいるのかどうかを明らかにすることは今後の指導のために

重要な意義を持つ。本研究では、三実習を合わせて「印象に残った場面」について記述があった110のケースを分析する。アンケートは無記名であったため厳密な分析はできないが、全体としての傾向を見ることはできる。さらに意欲が低下した「非援助的」と考えられる23場面については内容分析を行うこととする。

1) 印象に残った場面

「印象に残った場面」の記述内容から指導者の職種・実習の時期・印象に残った場面・指導者のかかわりの内容を意欲の現れである行動の変化と結びつけた。

2) 「援助的」印象場面と「非援助的」印象場面

印象に残った場面の内、意欲の向上と結びついた場面を「援助的」とし、意欲の低下と結びついた場面を「非援助的」とする。

## Ⅱ 研究の方法

1. 調査対象：中国短期大学 専攻科介護福祉専攻学生40名

全員短期大学保育士養成課程を修了した者（内 17名は社会人経験あり）

2. 調査時期：平成11年5～12月

介護実習Ⅰ（5～6月）、介護実習Ⅱ（9～10月）、介護実習Ⅲ（11～12月）

3. 調査方法：介護実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの各実習終了後にアンケートを実施

アンケート項目

- 1) 実習の時期・場所・指導者の職種
- 2) 印象に残った場面とその理由
- 3) 指導者とのかかわりの内容
- 4) 意欲の変化
- 5) 行動の変化

## Ⅲ 結果

1. 指導者との関係において経験した内容

指導に関わった職種では、寮母・介護職が圧倒的に多く（70%）、次いで看護婦（21%）となっている。本年度の実習施設は特別養護老人ホーム10施設、老人保健施設6施設であり、介護福祉士による指導が義務付けられることを考えると当然の関わりである。教員は（3%）で、巡回指導に回った際の短時間の関わりではあるが印象に残っている。わずかではあるが相談員（2%）・理学療法士（1%）・事務員（1%）からも直接、間接の指導をしてもらい影響を受けていることがわかる。実習のどの時期の指導が印象に残っているかに対しては、初期（42%）・中期（41%）に多く実習に慣れた後期（25%）も印象に残っている。指導を受けた場所と印象に残った場面と

しては居室が最も多く (29%), これは印象に残った場面で一番多い「排泄の介助場面」(27%)との関係が明らかである。次いで浴室 (15%), 食堂 (13%) であるが、これも介護の必要度の高い「食事の介助場面」(13%)・「排泄の介助場面」(27%)・「入浴の介助場面」(12%)と3つのケアの場面が多いのは当然であろう。

## 2. 介護実習における経験と意欲の関係について

110の場面の内、「援助的」場面は72 (65%), 「非援助的」場面は23 (21%)であった。このうち、「非援助的」については教育上大きな問題であり、その後の学習への意欲や進路の決定にも影響することが懸念される。これらの場面を分析し、何が学生の意欲の低下につながるかを調べてみた。分析方法としては先行研究である磯本らの「臨地実習において学生が〈非援助〉として受けとめた臨床指導者の言動の分析」(1997)を参考にしてカテゴリー化を試みた。表1は筆者が看護教育に携わっていた時に臨地実習において学生が「非援助」として受けとめた指導者の言動について分析したものである。この分類をもとに看護学生と介護福祉学生とを比較した。

表1 臨地実習で看護学生が〈非援助〉として受けとめた指導者の言動の構成要素(磯本ら1997より)  
※はコード数を集計した件数

| コード (かっこ内はコード数)  | サブカテゴリー           | カテゴリー                        |
|--|-------------------|------------------------------|
| 1) 面倒くさそうな態度 (2)<br>2) 何かをしながら指導する (2)<br>3) イライラした態度 (2)                | 1. 丁寧に対応しない       | I ※ (17件)<br>学生に対する関心を示さない   |
| 4) 否定的な態度 (1)<br>5) 気持ちを理解しない (2)<br>6) 冷たい態度 (5)                        | 2. 学生の気持ちを理解しない   |                              |
| 7) 無視する (2)<br>8) 学生はじゃまという態度 (1)  | 3. 学生の存在を認めない     |                              |
| 9) 人前で怒る (3)<br>10) 一方的に怒る (9)   | 4. 怒る             | II ※ (17件)<br>学生に対する威圧的な言動   |
| 11) バカにした態度 (2)<br>12) あきれた顔をする (2)<br>13) 意地悪く言う (1)                    | 5. バカにした態度        |                              |
| 14) 指導しない (5)  | 6. 指導しない          |                              |
| 15) 学生と指導者の考えの違い (2)<br>16) 考えを押し付ける (2)                                 | 7. 学生の考えを尊重しない    | III ※ (16件)<br>学習の深まりを阻害する言動 |
| 17) 否定的評価 (3)  | 8. 学習内容に対する否定的評価  |                              |
| 18) 難しい質問をする (2)<br>19) 予想外の指導 (1)                                       | 9. 難しい質問をする       |                              |
| 20) 他学生と比較する (1)   | 10. 他学生と比較する      |                              |
| 21) 責任がとれるのと言う (4)<br>22) 学生は使い物にならないと言う (2)                             | 11. 反論の余地を与えない    | IV ※ (6件)<br>学習者として認めない      |
| 23) 悪口を言う (2)<br>24) 嫌みを言う (1)<br>25) 状況により態度が変わる (3)<br>26) 自信のない態度 (1) | 12. 適切でない役割モデルを示す | V ※ (7件)<br>役割モデルに対する失望      |
| 27) 実習の進め方の調整不足 (2)<br>28) 教員の不在 (1)                                     | 13. 教育環境の不備       | VI ※ (3件)<br>教育環境            |

表2 介護実習で学生が「非援助的」と受けとめた指導者の言動の分類

(表3のサブカテゴリー、カテゴリーを一部改変)

※はコード数を集計した件数

| コード (かっこ内はコード数)          | サブカテゴリー           | カテゴリー                        |
|--------------------------|-------------------|------------------------------|
| 1) 面倒くさそうな態度 (3)         | 1. 丁寧に対応しない       | I ※ (13件)<br>学生に対する関心を示さない   |
| 2) 気持ちを理解しない (2)         | 2. 学生の気持ちを理解しない   |                              |
| 3) 冷たい態度 (1)             |                   |                              |
| 4) 無視する (7)              | 3. 学生の存在を認めない     | II ※ (3件)<br>学生に対する威圧的な言動    |
| 5) 一方的に怒る (1)            | 4. 怒る             |                              |
| 6) バカにした態度 (2)           | 5. バカにした態度        | III ※ (10件)<br>学習の深まりを阻害する言動 |
| 7) 指導しない (2)             | 6. 指導しない          |                              |
| 8) 考えを押し付ける (1)          | 7. 学生の考えを尊重しない    |                              |
| 9) できないことしか言わない (1)      | 8. 学習内容に対する否定的評価  |                              |
| 10) 理解できない指導 (5)         | 9. 予想外の指導         |                              |
| 11) 他学生 (男子学生) と比較する (1) | 10. 平等に指導しない      | IV ※ (1件)<br>学習者として認めない      |
| 12) 学生は使い物にならないと言う (1)   | 11. 反論の余地を与えない    |                              |
| 13) 適切なケアを行わない (15)      | 12. 適切でない役割モデルを示す | V ※ (28件)<br>役割モデルに対する失望     |
| 14) 利用者に対して暴言を言う (7)     |                   |                              |
| 15) 状況により態度が変わる (1)      |                   |                              |
| 16) 方法が統一されていない (4)      |                   |                              |
| 17) 指導された方法と実際とが違う (1)   |                   |                              |
| 18) 実習の進め方の調整不足 (1)      | 13. 教育環境の不備       | VI ※ (2件)<br>教育環境の不備         |
| 19) 学生を業務の中に組み込む (1)     |                   |                              |

## IV 考 察

介護実習において学生が「非援助的」として受けとめた指導者の言動から導き出された6つのカテゴリーを筆者はさらに3つの大カテゴリーに分類し、表1の分類と表2を比較して考察する。

1. カテゴリーI「学生に対する否定的な態度」とカテゴリーIIの「学生に対する威圧的な態度」、カテゴリーIVの「学習者として認めない」について学習者と指導者との人間関係から考えてみると、I・II・IVに共通するのは学生に対する指導者の不適切な対応である。これは学生に対する心理的(情緒的)な問題から学習意欲の低下につながったと考えられる。坂元(1980)は、学習意欲を高めるための行動特性を分析してその構造を明らかにした。それによると、教員のはたらかかけとして「頑張っているところを見つけてほめる」「完成の喜びを味合わせる」で、努力を承認し学習に充足感を与えることである。次に「課題のねらいをはっきりさせる」「段階的な目標を与える」と続く。介護実習における学生は、慣れない環境で緊張の高い状況下におかれながらも、その中で自分の目標に向かって精一杯の努力をしている。アンケートの中でも、「学生の不安を理解し、心の支えになってほしい」「悪いところばかり指摘されて認めてもらえないと頑張ろうと思えない」との記述が認められる。指導者は、まずその学生との人間関係をつくること

が重要であり、受容し学生の努力を認めることから始めなければ実習に対する意欲につながらないことは当然のことである。

2. カテゴリーⅢ「学習の深まりを阻害する言動」とⅥ「教育環境の不備」については、利用者に対する学生の実習活動に対する指導の問題と捉えることができる。カリキュラム上の問題も含まれているが、介護福祉教育に関する指導者の知識・技術的な問題から学習意欲の低下につながったのではないかと考察する。特に学習の深化においては、学内で学んだことを否定的に捉え、「そんなことは現場で通用しない」という言動や、初めて利用者に接することを不安に感じている学生に対し、「やってみなさい」と強引に車椅子からベッドへの移乗をさせる。失敗した学生は「どうしてよいかわからなかった」という記述をしている。看護教育においては、長い時間の蓄積の中で臨床実習が授業として位置付けられつつある。介護福祉教育においても歴史的に共通する課題と捉えると、介護実習における「知」の教育を促進する必要があると考える。介護実習での経験を学力にするための学習プロセスについては、J. デューイの「経験」の概念を用いると理解しやすい。J. デューイのいう「経験」には直接的経験と反省的経験とがあり、介護実習での経験は「利用者とのかかわりの中で感覚的に何か気になった事象を介護の視点で意味づけること」と言いかえることができる。これを深化・促進する指導が望ましく、適切な指導により反省的实践家を育成することができる。それではどのような指導が望ましいのであろうか。看護教育における実習の形態には、見習い実習型・知識適用型・技能訓練型・経験型の4つのタイプがある。その内の経験型といわれる実習では、実習現場にどっぷりつかるといふ直接的経験の中で学生は反省的経験を繰り返しながら学んでいくという実習モデルである。指導者は学生に何かを提案することはあっても、何かをすることを学生に強要することはない。指導者に求められるのは、知的能力と実践能力と学習援助能力をバランスよく使う能力である。状況の変化に富んだ介護実習の場では1つのタイプの実習形態のみで行うことは困難であり、4つのタイプをいくつか組み合わせた実習形態にならざるを得ない。将来的には経験型のように様々な場面での問題解決技法を取り入れる実習形態への移行が望まれる。

3. V「役割モデルを示さない」については、学生は指導者が利用者に対して行う介護の実践を福祉的な視点から見て理論と実践のズレを感じたものである。利用者への尊厳や介護福祉士そのものへのあるべき姿に対する価値観が揺さぶられ、意欲の低下につながったと考えられる。コードの中で最も多かったのは、「適切なケアを行わない」というものであった。介護実習において利用者の介護を指導者と共に実践する中で、利用者の人権や尊厳に触れる場面では、学生は素直に反応している。学内で学んだ知識や技術は応用するまでには至らないが、介護福祉士になるための概念・価値観はしっかり持っていることがわかる。介護福祉士の国家資格化により、専門職としての「介護」の一定の専門的技術、知識レベルが保証されることになった。医療の概念やリハビリテーションの方法論としての「自立」についても比較的現場に浸透してきている。しかし、「介護福祉」という福祉の領域における概念で最も重要な人権・個の尊重・自己決定に関わる介護者の資質に触れる部分では、その成熟にはまだ時間がかかると思える。介護福祉士という資格は名

表3 カテゴリー別 件数の比較

|                                | 看護学生が非援助と受けとめた件数と割合（総件数 66） |     | 介護福祉学生が非援助と受けとめた件数と割合（総件数 57） |     |
|--------------------------------|-----------------------------|-----|-------------------------------|-----|
| カテゴリー I                        | 17                          | 25% | 13                            | 22% |
| カテゴリー II                       | 17                          | 25% | 3                             | 6%  |
| カテゴリー III                      | 16                          | 24% | 10                            | 17% |
| カテゴリー IV                       | 6                           | 9%  | 1                             | 2%  |
| カテゴリー V                        | 7                           | 11% | 28                            | 50% |
| カテゴリー VI                       | 3                           | 5%  | 2                             | 3%  |
| カテゴリー I・II・IVの合計<br>（情緒的な問題）   | 40                          | 60% | 17                            | 29% |
| カテゴリー III・VIの合計<br>（知識・技術的な問題） | 19                          | 29% | 12                            | 21% |
| カテゴリー V<br>（観念的な問題）            | 7                           | 11% | 28                            | 50% |

称独占であり、専門職としての社会的な承認もまだ弱い。21世紀という超高齢社会を担い期待される介護福祉士は、専門職としての自覚を持ち、専門職性の内的条件を整えることが急務であろう。①仕事に対する情熱や使命感②人間尊重に立脚する価値観③対象者に対する深い愛情④暖かいパーソナリティ⑤豊かな感受性や深い洞察力⑥社会科学的視点⑦豊かな実践経験⑧福祉活動への積極的姿勢である。

4. 以上3つの大きなカテゴリーについて考察したが、ここで筆者は「非援助的」と受けとめた指導者の言動の件数について看護学生との比較を試みた。本稿では結果のみの報告となるが、表3で明らかなように、カテゴリーI・II・IVの共通点である情緒的な問題の割合が看護学生60%と比較して介護福祉学生は29%と少ない。さらにカテゴリーVの観念的な問題についてみると、看護学生の11%に対し介護福祉学生は50%と非常に多いことがわかる。養成施設・実習施設の様々な要因が考えられるが、くわしい分析は今後の課題としたい。

## おわりに

専攻科介護福祉専攻1期生の学生が介護実習において経験した内容を明らかにし、学生が「非援助的」と受けとめた指導者の言動について分析した。指導者の関わりの概要がわかり、学生の実習への意欲は指導者の言動に大きな影響を受けていることがわかった。学生が「非援助」と受けとめた指導者の言動について分析した結果、6つのカテゴリーに分類され、さらに大きく3つにまとめて考察した。1つは、学生に対する指導者の不適切な対応であり、これは学生に対する心理的（情緒的）な問題から学習意欲の低下につながったと考えられる。2つ目は、利用者に対する学生の実習活動に対する指導の問題と捉えることができる。カリキュラム上の問題も含まれているが、介護

福祉教育に関する指導者の知識・技術的な問題から学習意欲の低下につながったのではないかと考察する。カリキュラムデザイン・介護実習での経験の学力化・技術の深化への指導法と関係することがわかった。3つ目は、利用者への尊厳や介護福祉士そのものへのあるべき姿に対する価値観が揺さぶられたことが、意欲の低下につながったと考えられる。専門職としての介護福祉士の課題として内的な条件の充実が求められることがわかった。本研究では学生が「非援助的」と受けとめた指導者の関わりについて分析した。今後は「援助的」と受けとめた指導者の言動についても分析し、介護実習における学生の意欲を維持促進できるような教授行動を明らかにしたい。介護福祉教育における実習の意義をさらに追究し、実習施設における指導者と共に良い学習環境を提供することは養成施設における重要な課題である。

## 〈文 献〉

- 1) 磯本暁子 掛橋千賀子 安酸史子 田邊和代 中西啓子 坂本みどり 川上道子 河村良子 岡田淳子 四宮美佐恵 玄馬康子 : 臨地実習において学生が〈非援助〉として受けとめた臨床指導者の言動の分析. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 第4巻1号, P13-19, 1997.
- 2) 新井那二郎: 教室の動機づけの理論と実際, 金子書房, 1995.
- 3) 藤岡完治他: 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック, 第1版, 医学書院, 1996.
- 4) 蟻塚昌克: 介護保険時代の医療・福祉経営の課題, 総合ケア, 医歯薬出版, Vol10, No3, 2000.
- 5) 一番ヶ瀬康子: 介護福祉職にいま何が求められているか, ミネルヴァ書房, 1998.
- 6) 一番ヶ瀬康子: 介護福祉士これでいいか, ミネルヴァ書房, 1998.
- 7) 福祉士養成講座委員会: 介護概論, 中央法規出版, 2000.